言語力を身につけることもさることながら、強靭な精神力を育てることもそれに劣らず重要であることを示唆している。

七、おわりに

言語はコミュニケーションの重要な手段であり、従って聴覚障害児のコミュニケーション障害の解決に当って、言語指導に力点が置かれるのは理にかなっている。しかしこの問題が解決されても、聴覚障害に基づくコミュニケーション障害は解決されない。ここで重要な意味を持つのが手話である。図3のB児は先天性高度難聴児であるが、普通小学校を学業に問題を残さず終えて中学に入った。小学校の間は、母親の強い希望で担任教師が授業中手話を使い、本児の学習を補助した。この場合の手話は本児にとって大きな助けとなったはずで、この効果は級友たちにも何らかの教育的効果をもたらしたと想像する。手話は聴覚障害者間だけでなく、聴覚障害者と健聴者の間でも広く使われる必要があるが、ただし、聴覚障害児（特に幼児期）の教育に導入するに当っては、慎重でなくてはならず、この問題は今後に残された重要な研究課題である。

〔引用文献〕
(一) Barthes,R.：第三の意味（沢崎浩平訳）。みすず書房、一九八四年、一五七頁。
(二) 斐老孟司：心とはなにか。斐老孟司編、心のはたらき、東京大学出版会、一九八九年、七頁。
(三) 岡本途也他：難聴―それを克服するために。真興交易医書出版部、一九八二年。

前田重治・蔵内宏和 共著
現代催眠学
―暗示と催眠の実際―
催眠法はすでに神経症の治療などに用いられて著効を収めてきたが、近来さらに社会生活などに応用されて注目を集めてきたのに際して、とかく誤用・誤解されやすいその理論と実際を、とくに心理学・医学の立場からやさしく説き明かしている。医師・心理学者、その他一般の教育に携わる方々にも一読をおすすめする。
〔A5判二九〇頁・一五四五円（税込み）〕
慶應通信刊

教育と医学 第38巻 6号 一九九〇

自閉症児のコミュニケーション障害と、その起源をめぐって

小林隆児
（大分大学教育学部助教授）

日常の臨床でよく遭遇する場面

（その1）四歳になるY君は無表情に相手に接近しては「開けて下さい」などと自分の要求を言葉で主張できますが、その他の時はトイレの便器に興味をもち、すぐにトイレに駆け込んでしまいます。手のひらを自分の顔に向けて、手をかざすようにして奇妙な視線を送る自閉症特有な目の動きをする子どもです。診察室で筆者はY君に、母親の方を指差して「この人は誰ですか」と尋ねると、「ママ」と答えました。そのあと筆者は自分の顔を指差して（実際は鼻を指差していたのかもしれませんが）「おじちゃんは誰」と尋ねました。すると即座に「ハナ（鼻）」と答えました。筆者が先にどのような質問をしたのか、現在の会話がどのような文脈の中で行われているのかを理解できないために、筆者の指差しの部分にのみ反応してY君なりに懸命に答えようとしたのでしょう。

（その2）H君は一歳ごろには「マンマ」という言葉を発していましたが、その後は言葉がなかなか増えませんでした。ただ、天気予報、県名などはどんどん覚えるようになりました。三歳になると、生活場面でも少しずつ言葉が使えるようになりましたが、まだ反響言語が目立っていました。とても人の面倒を見たがり、診察室で椅子を持ってきては筆者に「ありがとう」と言いながら勧めてくれます。主客転倒という現象、本来なら「どうぞ」というところをH君は「ありがとう」と言ってしまうのです。

H君との二回目の面接の中で、彼は診察室の大きな窓から見える素晴らしい眺めが気に入って、入室するなり盛んに外を眺めていました。その窓からは都市高速道路、橋、港、船など、子どもならずとも見飽きないほどの眺めです。彼は「高速道路」と言ってから、何度か窓を開けて外を眺めようとしました。そして窓を閉めてまた外を眺めていましたので、「ほかに何が見える」と尋ねたところ、「シマウマノコウシド（格子戸）」と答えたのです。筆者はこの答えの意味が分からず、しばし言葉に窮してしまいました。実はその窓には、細いワイヤが縦に何本も入っている破損防止のための強化ガラスが使用されていました。そのワイヤが外を眺める際に彼にとっては目障りだったのでしょうか。そのため何度も窓を開けては外を眺めていたのです。そんな時に筆者が「ほかに何が見える」と尋ねたために、彼の頭の中は目障りだった窓ガラスのことで占められていたため、「シマウマノコウシド（格子戸）」と表現したのではないかと思いました。彼の思考の流れで考えると、この答えは当然の反応かもしれません。しかし、筆者の質問の意図は、外の眺めについて話題を広げることでした。こちらの文脈の中で彼の反応を期待していたのですが、二人の間のコミュニケーションには大きなずれが生じていました。

自閉症児のコミュニケーション障害の特徴

国際的診断基準として現在よく使用されているDSM－Ⅲ－Rアメリカ精神医学会作成の精神疾患の診断のためのマニュアル第三版改訂）でみると、自閉症（DSM－Ⅲ－Rでは自閉性障害と呼んでいます）の診断基準は、

(1) 社会的相互作用の質的障害
(2) 言語的および非言語的コミュニケーションの質的障害
(3) 著しく制限された活動のレパートリー、興味、および創造性の発達

の三点がその柱になっています。第一の社会的相互作用の質的障害もコミュニケーション障害のひとつの姿を表していますので、自閉症の診断は、コミュニケーション障害の質的障害が最大のよりどころになっているといえましょう。診断基準の中でコミュニケーションの質的障害については、具体的に以下のように記載されています。

(1) 意志を伝える喃語（なんご）、表情、身振り、物まね、または話し言葉のような伝達様式のないこと。
(2) 非言語的意志伝達、例えば、視線を合わせること、顔の表情、身振りなどを用いて、対人的相互反応を開始し調節することの著しい異常（例えば、抱かれることを期待しない、抱かれると身体をこわばらせる、人に接しようとするとき、見たりほほえんだりしない、両親や訪問者に挨拶をしない、人の集まった所で、じっと一点を見つめたままでいるなど）
(3) 想像上の活動の欠如（例えば、大人の役、空想上の人物または動物になって遊ぶこと、想像上の事件についての話には興味を示さない）
(4) 音量、高さ、強調、速度、リズム、抑揚を含む会話の仕方の著しい異常（例えば、単調な口調、質問するようなメロディー、甲高い声）
(5) 常同的または反復性の言語の使用を含む会話の形式や、内容の異常（例えば、反響言語あるいはテレビのコマーシャルの機械的な繰り返し、単語や文節の独自な用い方、またはその場にふさわしくない言葉を頻繁に使用する）
(6) 適切な会話ができるのに、他人と会話をはじめたり、続けたりする能力の著しい異常（他人のさしはさむ言葉と無関係に、一つの話題について長々と独りで語りふける）

自閉症のコミュニケーション障害の背景に考えられるもの

こうした自閉症のコミュニケーション障害の基本に、いかなる障害を想定したらよいのでしょうか。わが国でも自閉症の原因論として言語認知障害説が広まってくるにつれ、自閉症の認知障害が注目されて今日に至っています。たしかに自閉症の認知面の特徴をみると、子どもによってかなりの相違はあるにしろ、多様な認知障害の存在が確認されています。

こうした認知障害が大人になって生じる場合には、失認と称されています。失認は認知能力が失われることです。知覚は単に感覚器官を通して刺激が入力されることですが、認知にはそれらの刺激を意味あるものとして認識する過程が含まれています。自閉症のような発達段階にもこうした概念を用いると、自閉症の認知障害を捉えやすくなります。

例えば視覚認知とは、ペンをみるとそれがペンであることが分かり、その使い方なども分かる能力を指しますが、視覚失認があると、物自体は見えるけれども、それが何という物で、どのように使われるものであるのかが分からなくなります。そうなると、自分がその物とどのように関わればいいのかが分かりませんから、こちらが期待するような物との関わりが困難になってしまいます。

聴覚失認では、人の声は聞こえても、意味ある言葉としては聞こえません。分からない外国語を聞いているような状態です。声自体は聞こえているわけですから、聴力検査で異常は発見されません。こうした状態にある子どもは、人の話が実際にはどのように聞こえているのか把握しがた

いのですが、能力の高い自閉症児のH君が成長した後、彼に幼児期を振り返ってもらい、当時の様子を尋ねると、「周囲の人の話はざわざわして騒々しいだけで、何を言っているのかさっぱり分からなかった」と語ってくれたことがありました。これなどは、聴覚失認の世界をよく表現しているなと思います。

その他の認知障害として自閉症で重視されているものに、相貌失認や同時失認などがあります。相貌失認とは、人の表情を読み取る認知の障害です。自閉症児は人の顔に注目せず、視線をそらすのが一般的な特徴ですが、学童期に入って落ち着きを示しはじめると、今までとは逆に、人の顔のそばまで近づいてまじまじと眺めるようになったりします。おぼろげながらも人の顔が捉えられるようになり、その意味を分かろうとするかのような行動に見えます。しかし、このような段階に入って初めて、人の表情を読み取ることは非常に困難だということが明らかになってくることが少なくありません。

同時失認とは、ある状況場面を一つのまとまりをもったものとして全体像を捉えることが困難な認知障害をいいます。部分的には分かっても全体で意味するものが捉えられないわけです。木を見て森を見ずという状態になるのです。例えば、図1のような一枚の絵を見せて、どういう状況場面かを説明させるとよく分かります。中央の男の子が女の子の乗っているブランコを横取りしようと意地悪をしている場面であることは、たとえ幼児でも二人の表情から読み取ることができます。しかし、自閉症の子どもでは「男ノ子ガブランコヲ握ッテイル」「女ノ子ガブランコニ乗ッテイル」といった説明はできても、それ以上のことはできないことが少なくありません。ごくありふれた状況場面ですが、全体の状況を察知できません。

では彼らはどのようにして周囲の世界を見て、何を手がかりにして自分なりに納得しようとしているのでしょうか。

図1　ことばのテストえほん（田口、笹沼；1964）

図2の図版を自閉症児のA君に見せて説明してもらいました。すると「オ母サン、チロチャン（主人公をリスのチロちゃんにしてストーリーを作ってもらうように、課題を出しています）起コシテイル。……トイレノマル、開ケルノガナイ。オカシイ。コノ家変ナノ。（診察室のドアを指差して）アアイウトコロガナイ。何カコノ家カワッテイルッチャ。コノ家コンクリートノ家ジャナイカラダ。コンクリートノ家ダッタラ開ケル所アルモン。」と反応しました。

図2　CAT図版「清潔」

図版を見ている間中、さかんに首をかしげているのが印象的でした。たしかに一枚の絵の中にさまざまな物を詰め込んでいますが、状況場面を分かりやすくするための手がかり刺激を増やすためになされています。しかし、彼にとってはどうも混乱を助長させているようでした。今までに見たトイレ、家の構造と余りにも掛け離れているために、その違いに戸惑ってしまったのでしょう。他の人であればあまり手がかりにしないような周辺の物が、彼にとっては自分の世界を意味づける際に非常に大きな手がかりになっていることを教えてくれます。彼は自閉傾向はほとんどなくなり、会話もほとんど問題なくできるようになり、知的水準も正常域でしたが、子ども同士で遊ぶといった社会性の発達にはまだ問題が残っているのは、こうした認知面の特徴を背景にもっていることが関連していると推定されるのです。

最近の自閉症の基本障害の仮説について

従来、わが国では自閉症のコミュニケーション障害は、ラター・Mらの提唱した言語認知障害仮説に基づいて、もっぱら言語に焦点が当てられてきたように思います。しかし、自閉症児自身が成長し、思春期ないし成人期に達して言語能力にほとんど問題をもたなくなる例が散見してくるにつれ、まだ残存する社会性の発達の障害が注目されるようになってきました。カナー・L自身が提起した自閉症児の情緒的接触の障害、ないし社会性の障害（自閉性）が再度注目されています。そもそも自閉症の診断がそこから

出発しているのですから、当然といえば当然のことです。ラター自身も最近では、社会性の障害が思春期・成人期自閉症に最後まで残存していることを重視し再検討を行っています。人との交流意欲を示しながらも、共感能力の問題をもち、人の感じ方や反応の予測ができないことや、人が何を考え感じているか理解できないことに苦悩する成人期の自閉症者の存在がその根拠になっています。言語認知障害仮説では、認知障害が一次的障害で、その結果社会性の障害が生じると主張されていました。社会性の発達と認知の発達は不可分の関係にありますが、両者の関係がそれほど単純ではないということを自閉症児の発達は教えてくれているといってよいでしょう。

そうした研究の動向の中で、最近ではホブソン・R・Pの感情理論とバロン・コーエン・Sの認知理論が注目されています。

前者の感情理論とは、自閉症の基本障害を他者と情緒的に関わる能力の先天的欠損にあるとし、カナー・Lの考え方にきわめて近いものです。図3に示したように、そうした基本的障害のために、他者の心理状態を認識できず、遊びや言葉の使用に問題が生じてくると説明されています。

後者の認知理論は、図4にみられるように、表象機能の中でも特にメタ表象機能の障害が自閉症の基本障害として重視されています。メタ表象機能とは、人が物事を考える（表象する）という一次的表象機能ではなく、自分も他者もそうした表象する機能を有する存在であることを認知するという、二次的表象機能を指します。こうした心理的

図3　感情理論 The affective theory
〔Hobson, R.P. 1989, Baron-Cohen, S.(1988)より引用〕

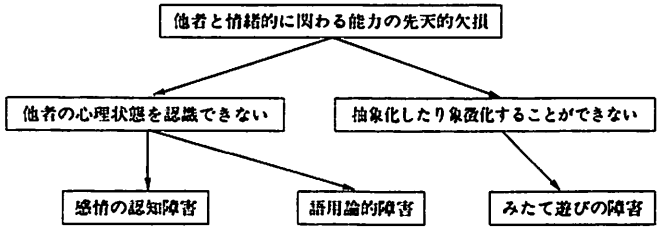
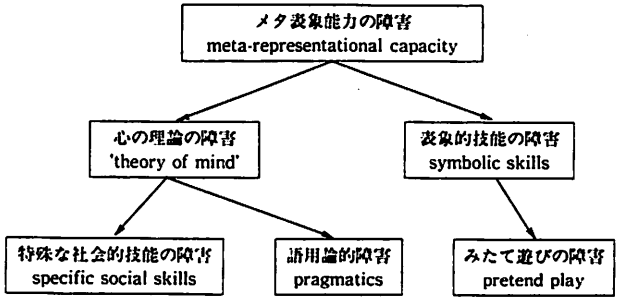


図4　認知理論 The cognitive theory
(Baron-Cohen, S. 1988)



機能が障害されているために、自閉症では、人間が心の中でものを考えたり、感じたりする存在であるという認知が困難になっているというのです。これは発達心理学の分野で、心の理論 theory of mind と呼ばれている考え方で、それが自閉症の社会性の発達の障害の説明として応用されています。自閉症児が遊びの中でも特にみたて遊びが困難なことは、よく知られています。何かにみたてているある物を、それが実際はそうでないということを知っていて、なおかつ何かにみたてることができるのは、こうしたメタ表象機能が働いているからで、自閉症児ではそうした心理的機能に障害があるからみたて遊び（想像遊び）ができないと説明されています。

このように、自閉症の基本障害に関する仮説は、最近になって大きく変化しつつあります。こうした動向の変化は、自閉症の中でも、特に知的能力の水準が高く、言語発達が良好に経過した例の中に依然残っている社会性の発達の問題を通して再検討がなされた結果、生まれてきているように思われます。自閉症と診断された子ども達の多くが思春期・成人期に達してきたことで、自閉症の研究が新しい局面を迎えつつあるといえましょう。

自閉症児のコミュニケーション障害に対する基本的な考え方

最後に、自閉症の基本障害について様々な仮説があるにしろ、実際の治療教育にあたって、自閉症のコミュニケーション障害についてどのように考えればよいか述べてみたいと思います。

自閉症児は他者に対する反応性が欠如している、すなわち周囲の人からの働きかけに対して反応しないことが特徴とされていますが、実際はそのように考えるよりも、視線を回避したり、相手を無視するといったもっと積極的な行動としてとらえるほうが、彼らの発達経過から考えるとより正確であるように思います。子どもにとって馴れ親しんだ人になると、びっくりするほど指示に従いますが、気に入らない相手になるととたんに無視するような態度を取ることは、誰しもしばしば経験することです。幼児期のようにまだ精神機能が未発達な段階で、表情を含め複雑な要素をもつ対人刺激は容易には受け入れがたく、知覚、認知、統合、汎化といった能力に問題をもつ自閉症児は、そうした刺激を無視したり、回避することでもって自分の精神生理的状態を好ましい状態に保とうとする、彼なりの精いっぱいの試みであると考えられます。

他者に対して次第に何らかの反応を示すようになってくると、先に述べたように、自閉症児のコミュニケーション障害の内容を理解する手がかりが得られやすくなってきます。人の音声刺激が少しずつ知覚認知できるようになってくるにつれ、出現してくる即時性反響言語や遅延性反響言語という現象は、人の音声刺激が部分的にのみ知覚、認知されているための過渡的な現象で、相手の言語になんとか反応を試みようとする努力が、意味は充分に把握できていない相手の言葉に対して反響言語で苦しまぎれに反応している姿といえましょう。先に述べた具体例は、こうした状態の自閉症児のコミュニケーションの姿を端的に表しています。

以上、自閉症児のコミュニケーション障害の具体的な姿とその背景にある障害について、最近の学説も含めて筆者の考えを述べてきましたが、自閉症児に対する治療教育の原則は、こうしたコミュニケーション障害の特徴を理解した上で、彼らのコミュニケーションの可能性を追求し、コミュニケートできる喜びを少しでも多く体験することができるように援助していくことであると思われます。

〔参考文献〕

(1) Baron-Cohen, S. : Social and pragmatic deficits in autism : cognitive or affective? Journal of Autism and Developmental Disorders, 18 (3) ; 379 - 402, 1988.

(2) American Psychiatric Association : Quick reference to the diagnostic criteria from DSM－Ⅲ－R, 1987. (高橋三郎ら訳：DSM－Ⅲ－R精神障害の分類と診断の手引。医学書院、一九八八。)

(3) Hobson, R.P. : Beyond cognition : a theory of autism. (Dawson, G. (ed.) : Autism-nature, diagnosis & treatment. pp. 22 - 48, Guilford Press, New York, 1989.)

(4) 小林隆児：コミュニケーションの病理。教育と医学、第二十九巻、第九号、九三〇－九三八、一九八一。

(5) Rutter, M. : Cognitive deficits in the pathogenesis of autism. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 24 (4) : 513－531, 1983.

(6) 田口恒夫・笹沼澄子：ことばのテストえほん―言語障害児の選別検査法―。幼児・小学生向、日本文化科学社、一九六四。

(7) 戸川行男ら（編）：幼児・児童絵画統画検査法（CAT日本版）。金子書房、一九五五。

精神遅滞児のコミュニケーション

西村辨作

（愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所治療学部第三研究室長）

一、はじめに

ダウン症という染色体の異常によって生じる発達障害の子どもがいる。千人に一人の割合で生まれる。この子どもたちの成長の過程をみていると、ことばやしぐさによって、好き、嫌い、欲しい、楽しい、一緒にいたいなどの自分の心の状態を外に向かって表示し、しかもそれを受けとめて欲しいという気持ちは、障害のあるなし、またその軽重を問わず、人間だれしもが持つほとんど生来的な欲求ではないかと思われる。

人は、大人にしろ子どもにしろ協力しあって育ち生きていく。象徴的記号である言語とそれを発声構音器官で表現した話しことばは、コミュニケーションの重要な手段である。しかし厳密にいえば、人はことばだけで伝達しているわけではない（ここでは言語と話しことばを総称して「ことば」という）。伝えたい考えと心持ちを言語の記号にのせて、話しことばで表現し、しかも表情、しぐさ、視線など話しことばではない信号、いわゆるノンバーバルな信号とともに人に伝える。それを聴いた人は、自分のなかに生じた意思と感情の反応を行動に移すか、あるいは言語の記号とノンバーバルな信号で反応を表現して送り返す。このやり取りの相互の過程がコミュニケーションである。伝え合うという行動のなかに、社会的存在としての人間の特徴がよく現われているが、ことばによる伝達の能力は、生来的な伝え合いの欲求に根ざして発達する。

筆者はこの小論を、精神遅滞児のコミュニケーションの能力がいかに遅れているかという形では書かない。その記載は必要最小限にとどめる。むしろ、その障害を軽減させ、